

『格差と民主主義』を読む

本書はロバート・ライシュ近著邦訳である。「はじめに」から。私は本書で、私たちの経済活動や民主主義が、どうして、あるいはどんな風に、普通の労働者には不公正なゲームに見えてしまうのかを説き、さらにこういう事態に対して何がなされるべきで、私たちには何ができるのかについて全体像を示したいと考えた。これを私は、私独自の理由から「怒りを越えて」(本書の原著タイトル *Beyond Outrage* の直訳)と名付けている。

本書はPART1「不公正なゲーム」、2「急進主義的右派の勃興」、3「怒りを乗り越えて—私たちがしなければならないこと」から構成されている。数多くのイラストは、すべてライシュ本人によるもので、問題を一目でつかむことができる。とにかく分かりやすい。

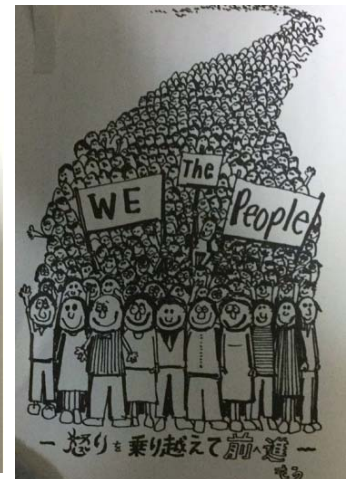
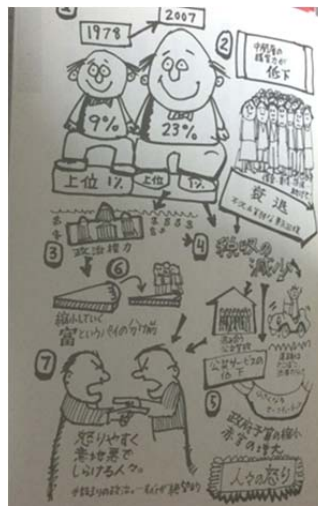
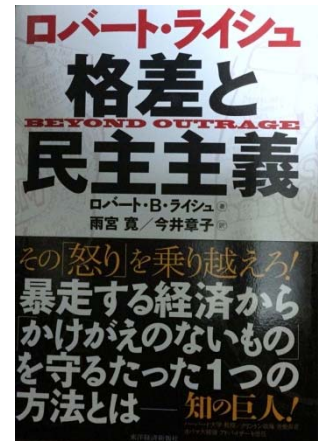
写真右は、社会がいかに平均的な勤労層に不利に働いていて、逆に金満政治家や大企業に有利に働く不公正なゲームになりつつあるかを説明する。

右は「怒りを乗り越えて前へ進もう」という呼びかけが、「WE The People」という言葉に込められている。

アメリカだけでなく日本の現実を考えながら、本書を一気に読んだ。紹介したいことは多いが、次の2点だけにしよう。

課題という名の繭玉のなかに引きこもるのはやめよう。進歩派にありがちなのは、特定の課題にこだわって「彼らの」闘いにしてしまい、他のことは考えないことだ。--- 一つの問題だけに惑わされてはならない。他の人たちが自分たちの闘いだけにこだわることも容認してはいけない。そんなことではさらに大きな難題のために団結することができなくなり、たとえば収入、富、政治権力の上層部への集中、多国籍企業やウォール街の影響力の増大、この国の民主主義の崩壊など、あらゆる課題に対する庶民の声が届かなくなってしまう。

いつの時代においても、理想から逸脱した経済と民主主義のあり方に道徳的な怒りを感じ、その怒りを乗り越えて真の改革のために尽力した膨大な数の人々の関与と献身があったからこそ、この国は前進することができたのだ。今、あなたの怒りと献身が、もう一度求められているのである。



(2015年1月11日)